

外国人のみた日本 日本での生活を観察して (カルチャー・ショック)

著者	Corazon Lira Rapera, 梶山 貴史[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	124
ページ	40-40
発行年	2006-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005561

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Corazon Lira Rapera
出身地：フィリピン・イロイロ
所属：フィリピン大学ロスバニョス校経済・経営学部農業経済学科准教授
日本滞在：2005年5月～12月

日本での生活を観察して

コラゾン・リラ・ラペラ

二〇〇五年五月三〇日は、私にとって四度目の来日となった。研究や会議による過去三回の来日が有意義なものであったため、今回もそのような期待があった。

四度目の来日は、概して過去三度のものとは変わらなかった。千葉の日本人は、大阪、東京、島根のカウンターパート同様、礼儀正しく親切で有能であったが、環境だけが異なっていた。現在の私には、会議運営者が準備するスケジュールはない。他の人々と同様に、私は毎日通勤している。私にはありがたい、英語を話す人々もいたが、今回の来日では以下の点が気になった。

①日本社会には二つの際だったグループが存在する。最初のグループは、幼い子供と老齢の方である。二番目は、最初のグループに属さないその他の人たちである。前者は話したり、笑ったり、ゆつくりと歩く余裕がある。一方、後者は素速く歩いたりより速く走る電車やバスに乗り、乗車中には付けているイヤホンから伝わる音声のみに耳を傾けることが必須のようである。

②製品ラベルに記載された「Made in Japan」は、その製品が日本で見つからないことがあり、また、日本のメーカーがその製品の修理方法を知らない（？）こともある。某一流日本メーカー製の私のパソコン

に不具合が発生した際に、そのパソコンを修理のためにシンガポールに送るよう、そのメーカーから私は指示されたのだ。

もう一つの例として、私の国ではありふれた紙テープの、「Made in Japan」と確かはその製品に明記されていたものが、この日本で見つからなかったことも紹介しておきたい。私のカウンタートパートも、日本市場からその製品が消えてしまった理由が分からなかった。だが、その彼は類似した明らかに古いテープを研究所内で見つけ出した。彼はそのロールを私に丁寧に渡してくれたが、もはや私はそれを使う気にはなれなかった。それが日本では、既にアンティークのようになってしまったためだ！

③初歩的な知識では、予想できないことが起こる。気軽に使用できると思った日本語を話したときのこと。学んだ言葉で日本人と意思疎通できたこともあったが、頭が混乱したことも多々あった。日本語で質問をすると、聞き手の方はすらすらと流暢な日本語で答えてくれる。だが、現時点で理解できる言葉は、「ありがとう」、「すみません」、「ください」で、得意な言葉は「ごめんなさい」と「分かりません」だ。

④善意は言葉で表す必要はない。英語を話さない日本人とは、意味のある会話はで

きないと私は思っていたが、善意とは会話がなくとも示せることを知った。通勤途中や帰宅の際、庭いじりをしている老人に出会う。私たちは「こんにちは」と挨拶を交わすだけだが、それは心地良く感じられる。私は彼の姿を立って見ているだけだが、その庭に魅了され、思わず見入ってしまう。

私の通勤途中にあるJR幕張本郷駅では、バス停のところに、バスの発着整理を行う紳士がいる。毎朝バスに乗車する前に彼に手を振って、お辞儀をせずに「おはようございます」と挨拶をする。彼は他の人と同様に私にお辞儀をし、お互い微笑み合うのだ。また、数え切れない人々が言葉のない善意を示してくれる。アジア経済研究所の受付、守衛、カフェテリアの方々や、研究所やその洗面所を掃除する方々でさえも、私にこのような対応をしてくれる。

前述したこれらの体験はカルチャーショックではないかもしれないが、私のように五〇歳を超えている人がショックというものを探すべきではないのではないか。その代わりに、人間の本质は基本的にどこでも良いと認識したうえで、慰めや勇気づけになることを私は探すべきだと思う。これが千葉での日本の生活を通して感じたことだ。

(前海外客員研究員／訳 榎山貴史)